

1 課

4月2日

創造の御業



安息日午後 3月26日

暗唱聖句

初めに、神は天地を創造された。(創世記 1 : 1、新共同訳)

はじめに神は天と地とを創造された。(創世記 1 : 1、口語訳)

今週の聖句

詩編 100 : 1～3、創世記 1～2 章、出エジプト記 20 : 8～11、
出エジプト記 40 : 33、マタイ 25 : 14～30、マタイ 19 : 7～9

今週のテーマ

創世記は、そして聖書全体は神の創造の御業をもって始まります。この事実は、私たち人類の創造をもって、人類歴史と聖書歴史が始まることを意味しているため、非常に重要です。この真理はまた、創世記の創造の物語が、人類歴史と聖書歴史における他の出来事と同じように、歴史的真實性を持っていることを意味します。

創世記1章と2章の二つの創造の記述には、神と人類についての数々の教訓が含まれています。今週の学びを通して私たちは、第七日安息日の意味をより深く理解することができます。神が御自分にかたどって、土から人間を造られたことについてもじっくり考えます。善悪の知識の木を置かれた目的と命の木との関係性についての学びは興味深いものとなるでしょう。

世界の始まりについての聖書の物語から学ぶべき最も重要な教訓は、恵みについての教訓です。私たちの存在は純粹に恵みの業によるものです。神は、まだ人間が存在しない時に天地を創造されたのです。私たちの創造と同じように、私たちの贖いもまた神からの賜物なのです。創造と贖い、この二つの考えが第七日安息日の戒めの中に存在するということは、なんと意義深いことでしょう。

問1 詩編100:1～3を読んでください。創造の神に対する人間の応答はどのようなものですか。なぜそのように応答するのでしょうか。

創世記1章において聖書が最初に伝えるメッセージは「神」です。「初めに、神は」という翻訳で、すでになじみのある箇所です(創1:1)。1行目に、しかもその節の真ん中に「神」という言葉が置かれ、伝統的典礼における詠唱では、神の重要性を強調するために「神」に最も強いアクセントが置かれて詠まれました。創造の記述は、天地創造の創造主なる神の強調をもって始まっています。

実際に、創世記は神についての二つの異なる紹介をもって始まります。最初の創造の記述(創1:1～2:4)は、神は人間から遠く離れた存在であって、超越的な神、「エロヒーム」(Elohim)として提示します。このエロヒームという名は神の至高性を示すもので、神の卓越と権威を表し、複数形で用いられるときには、その主権と超越性を表します。

二番目の創造の記述(創2:4～25)は、神を身近で人格的な内在する神、「ヤハウェ」(YHWH)として提示します。多くの人々はこの名が身近な関係性を表すと考えています。創造の記述は全体として、神を礼拝するようにとの暗黙の注意喚起なのです。その初めに神の無限の偉大さと力について注意を喚起し、同時に私たちは神に依存する存在であることを告げます。なぜなら、神が私たちを創造し、「わたしたちは主のもの」(詩編100:3)だからです。多くの詩編が礼拝と創造を結びつけている理由がここにあります(同95:1～6、139:13、14[黙14:7と比較])。

この神に対する二つの見方、すなわち、神は威厳と力に満ちた方であり、また私たちとの関係においては身近で、情け深いお方であるという事実は、礼拝において私たちがどのように神に近づくべきかを考える上で重要なポイントを示しています。畏れと畏敬の念には、喜びと神の近さ、赦し、そして愛による安らぎが伴わねばなりません(詩編2:11参照)。神についての二つの説明の順番には意味があります。神の近さの経験と神の存在に対する親近感は、神への隔たり〔畏敬〕の経験に続くものです。私たちは神の偉大さを理解して初めて、神の恵みを味わい、おののきつつ、私たちの人生に現された神の不思議と愛の存在を喜ぶことができるのです。

宇宙を支えられる神の測り知れない力が、私たち1人ひとりのそば近くにおいでくださるのです。この驚くべき真理はなぜ驚嘆に値することなのでしょう。

問2 創世記1:4、10、12、18、21、25、31と創世記2:1~3を読んでください。最初の創造の記述では、なぜこれほど「良しとされた」が繰り返されているのでしょうか。創造の完成にはどんな教訓が含まれているのでしょうか(創2:1~3)。

天地創造の記述の区切りごとに、神はその御業を「良し」とされます。一般的にこの「良い」という形容詞は、神の創造の御業が成功したことを意味し、「良しとされた」との神の所見は、それがきちんと「機能している」ことを意味します。光は輝き(創1:4)、植物は実を实らせていました(同1:12)。

しかし、この言葉はただ単に被造物の機能以上のことを意味しています。「良い」と訳されているヘブライ語の「トーフ」は、聖書の中では美しいものに対する美的価値の評価にも用いられる表現です(創24:16)。それは、悪との対比に用いられ(同2:9)、その悪とは死を伴うものです(同2:17)。

「良しとされた」との表現は、創造の御業がうまく機能しており、美しく完璧で、その中に何の悪もなかったことを意味します。創造直後の世界は、罪と死の影響を受けている私たちの世界のようにありませんでした。このことは、天地創造の二番目の記述の導入部分で確認されています(同2:5参照)。

この天地創造の記述には、進化論との根本的な矛盾があります。進化論は、偶然の出来事の連続によって、劣った状態から優れた状態へと段階的に変化することで世界が形作られたということを、独断的に宣言しているものだからです。

これとは対照的に、聖書の著者は、神が意図をもって突然に世界を創造されたと断言します(創1:1)。そこには偶然や予測不能な出来事の入り込む余地はまったくありません。世界は、それ自体によって生まれたのではなく、ただ神の御心と御言葉によって造られたのです(同1:3)。創世記1章で、「初めに、神は天地を創造された」と訳されている「創造する」という動詞「バーラー」は、神を主語とする場合にみに用いられており、時間をかけて行う作業を意味しません。「神は言われ……、そのようになった」のです。

天地創造の記述は私たちに、「すべてのもの」がその時に(創1:31)、創造主ご自身によって造られ、神はそのすべてを「極めて良かった」と判断されたと述べます(同1:31)。創世記1:1はまさに天地創造の出来事を語り、創世記2:1はその出来事の完成を宣言します。そして、安息日を含むすべてが七日間で完成したのです。

何十億年もの時をかけての進化論という考えは、なぜ創世記の創造の物語を完全に無効にしてしまうのでしょうか。これら二つの思想は、なぜまったく相容れないのでしょうか。

問3 創世記2:2、3と出エジプト記20:8~11を読んでください。なぜ第七日安息日は創造と結びついているのでしょうか。この関係は私たちが安息日を守る上でどのように影響しますか。

聖書は、神がその創造の御業を「終えられた」(口語訳) からこそ、安息日を定められたと明確に宣言します。ですから、第七日安息日は、神が七日目に創造の御業を終え、それを「極めて良かった」と認めたことを信じる私たちの信仰の表明なのです。安息日を守ることは、神と共に神の創造の価値と美しさを認め、祝うことなのです。

神が御自分の仕事を終えて休まれたように、私たちも自分の働きを休むことができるのです。安息日を休むということは、私たちの肉体をも含む神の「はなはだ良かった」創造に対して、「はい、その通りです」と言うことなのです。古代の(あるいは現代の)ある信仰とは違って、新旧約聖書の中には人間の肉体を邪悪なものとしてさげすむような思想はありません。それは異教の思想であり、聖書的な考えではありません。むしろ、安息日を遵守する民は、自分の体も含む神の被造物に感謝し、創造の御業を喜び祝い、自分の体を大切にします。

人類歴史の最初の「終わり」を告げる安息日はまた、人類の苦しみと世界のうめきに対する希望のしるしでもあります。この「仕事を終えた」という表現が、聖所の建設の最後(出40:33)と、ソロモンの神殿建設の最後(列上7:40、51)に用いられているのは興味深いことです。いずれの場所も、福音と救いが教えられた場所です。

人類の墮落以後、安息日は週末ごとに救いの奇跡を指し示すものとなりました。しかしこの救いの奇跡は、新しい天と新しい地の創造という奇跡を通してのみ完成するのです(イザ65:17、黙21:1)。安息日は、私たち人類にとっての1週間の終わりに、この世の苦しみと試練にもやがて終わる時が来るということの象徴でもあるのです。

だからこそ、イエスは病人をいやすのに最もふさわしい日として安息日をお選びになったのです(ルカ13:13~16)。当時の指導者たちがとらわれていたどんな伝統とも異なり、イエスは安息日のいやしを通して、人々の目を、そして私たちの目を、すべての痛み、すべての苦しみ、すべての死が終わるとき、すなわち、救いの計画が最終的に完成する時へと向けられました。それゆえ、毎週の安息日は、私たちに救いの希望を指示しているのです。

私たちは安息日を休むことによって、現在、イエスの内にある休みと救い、そして将来、新しい天と地の創造によって最終的に完成する休みと救いをどのように経験できるでしょうか。

少なくとも創世記の記述によれば、神の創造の御業の最後の作業は人の創造でした。人は地上のすべての創造の頂点であり、この目的のために地は造られたのでした。

問4 創世記1：26～29と同2：7を読んでください。人の創造についてのこれら二つの記述にはどのような関係がありますか。

神が人を御自分にかたどって創造されたという記述は、聖書の中で最も大胆な声明です。人だけが神に似せて造られました。「神は、地の獣を……種類にしたがって造られ」ましたが（創1：25、口語訳）、「神は**自分の**かたちに人を創造され」ました（同1：27、口語訳、強調付加）。この決まり文句は、しばしば人の霊的な性質に限定して「神のかたち」として翻訳されてきましたが、それは神を代表するという役割、あるいは神との、または人との関係における霊的役割のみを意味するものと理解されてきました。

こうした理解は正しいのですが、この創造に含まれる重要な身体的な真実を見落としています。創世記1：26（口語訳）に記されたこの作業過程を描写する二つの言葉、すなわち「かたち」と「かたどって」は、まぎれもなく、霊的、身体的両方の次元を含むものです。「かたち」と訳されているヘブライ語の「ツェレム」は、肉体の完全な形を意味し、「かたどって」と訳されている「デムート」は、神格に匹敵する超然な性質を意味します。

したがって、ヘブライ語の「神のかたち」の概念は、聖書の人間観についての全体的な意味として理解する必要があります。聖書は、1人ひとりの人が（男性であれ女性であれ）霊的にも、身体的にも神のみかたちにかたどって造られたと断言します。エレン・G・ホワイトも「アダムが創造主のみ手によってつくられたとき、彼の肉体と知能と霊性は、神のみかたちをそなえていた」と述べています（『教育』4ページ）。

実際、身体を含むこの神のかたちの全体的な理解は、もう一つの創造についての記述でも再び断言されています。「人はこうして生きる者となった」（創2：7）とある通り、人は神が「形づくり」、神が「息を吹き入れ」という二つの神の行為の結果、「生きる者」となったのです。「息」はしばしば霊的次元を意味しますが、同時に生物学上の呼吸とも密接に関係し、呼吸は「土のちりて人を造」られた人間の重要な機能の一つです。それは「**命の息**」、すなわち息（霊）と命（身体）の両方を持つ存在を意味します。

神はその後、三番目の作業として、男の体から女を造られます。（創2：21、22）それは、女が男と同じ性質を持つ存在であることを強調するためでした。

神は最初の人間を造られるとすぐに、彼に三つの賜物、エデンの園（創2：8）、食べ物（同2：16）、そして女（同2：22）をお与えになります。

問5 創世記2：15～17を読んでください。被造物と神に対する人間の責務は何でしたか。これら二つは互いにどのように関連していますか。

「人がそこを耕し、守るようにされた」（創2：15）とあるように、神が人に与えられた第一の責務は自然環境に関わるものでした。ここに出てくる動詞「耕す」と訳されているヘブライ語「アーバド」には働くという意味があります。賜物は受けるだけでは十分ではありません。私たちはそれを用いて働き、実を实らせなければなりません。それはイエスがタラントのたとえで繰り返し教えておられることでもあります（マタ25：14～30）。「守る」と訳されている動詞「シャーマル」は、すでに受けているものを管理する責任を意味します。

二番目の責務は食べ物に関するものでした。神が人に食べ物をお与えになったことを忘れてはなりません（創1：29）。神はまた人に「心のままに取って食べてよろしい」（同2：16、口語訳）と言われました。人は木々を創造しませんでしたし、そこに実る食べ物も造りませんでした。それらは恵みの賜物でした。

しかし、彼らには命令も与えられていました。彼らは神から「どの木からでも……取って食べてよい」（同2：16、口語訳）と惜しみなく賜物を受け、それを楽しむはずでした。しかし、この恵みの一部として、神は一つの制限を加えられます。彼らは1本の特別な木からは取って食べてはなりませんでした。何の制限もなく楽しむことは死に至ります。この原則はエデンの園でそうであったように、あらゆる事柄において今日も同じです。

三番目の責務は女性に関するものでした。神の三番目の賜物は、「人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となる」（創2：24、口語訳）というものでした。この驚くべき声明は、人の婚姻の契約に伴う責任と、1人の人を意味する「一体」となることを強調しています（マタ19：7～9と比較）。

その父母を離れるのが（女でなく）男〔英語ではthe man〕であるのは、聖書で一般的な男性名詞の使用によるものであると思われます。ですから、この命令は女性にも適用されるものです。いずれにせよ、結婚による結びつきは神からの賜物ですが、一度この賜物を受けたなら人間の側の責任を伴うものであり、その責任は男と女の両方が忠実に果たすことを要求するものです。

神があなたに与えられたものすべてについて考えてみてください。それらのあなたが受けたものに伴う責任はどのようなものでしょうか。

参考資料として、『教育』第5章「聖書の教育的価値」の中の「科学と聖書」の項を読んでください。

「自然という書と神の啓示である聖書には、同じ創造主の印が押されているので、両方の語るところは一致せざるを得ないのである。その方法は違い、言葉は違っても、両者は共に同じ大いなる真理を証明している。科学は絶えず新しい驚くべきことを発見しているが、しかし科学の探求によって発見されるものには、それが正しく理解されるかぎり聖書と矛盾するものは一つもない。自然の書と聖書は互いに光を照らしあっている。自然と聖書はどちらも神の働かれる法則を教えることによって、われわれに神を知らせるのである。

しかしながら、自然の中に観察されるいろいろな事がらから誤った推論が出されたために、科学と聖書の間に矛盾があるかのように想像されている。そうして両者の調和を図ろうとして、神のみ言葉の能力を傷つけ滅ぼすような聖書の解釈をしてきたのである。創造に関するモーセの記録の字義通りの解釈と地質学とは矛盾するように考えられている。地が混沌の状態から進化するには幾百万年の年月を要したと主張されている。そしてこの科学の想像的な啓示に聖書を適応させようとすれば、創造の期間は幾万年あるいは幾百万年という膨大なばくぜんたる年月であったと仮定されるのである。

このような結論は全く無用である。聖書の記録はそれ自体と一致し、また自然の教えと一致している」（『教育』138、139ページ）。

話し合いのための質問

- ① 私たちが、創世記の世界の始まりの物語は伝説、すなわち本質的に私たちに霊的な教訓を教えるために作られた「神話」であって、歴史的な事実ではないという考えを信じるなら、それは私たちの信仰の質にどのような影響を与えるでしょうか。聖書の記述の中には、創世記の著者が、この書の他の物語と同じように、創造の物語も「歴史的事実」であることを知っていたことを示すどのようなヒントがありますか。イエスは創造の物語の歴史的真相をどのように証ししておられますか。
- ② 創世記の物語は、地球の管理者としての私たちの責務の重要性について何を教えていますか。私たちはどうすれば、地球の良き管理者となると同時に、非常に現実的な誘惑として、創造主ご自身でなく被造物を礼拝するという最大の危険を避けることができるでしょうか（ロマ1：25 参照）。
- ③ 数千年におよぶ罪による荒廃にもかかわらず、当初の「極めて良かった」創造の御業の不思議、美しさ、荘厳さは、どのような形でなお神の善と権威を語り示しているでしょうか。

安息日のためにばかにされる

モザンビークのレッサ・サミラ・ヤシンは、土曜のクラスを休んだため、学生たちにばかにされていました。「この大学に勉強しに来たのであって、教会の教えに従うためではないでしょう?」「気が狂っている」

レッサが公立大学の最初の学期に機械工学の勉強で苦しんでいた時に、アドベンチストのクラスメートのベリザリオに聴かせてもらった音楽で平安を得たことがすべての始まりでした。レッサは、ベリザリオと聖書研究を始めました。レッサには他の友人もいて、彼らとも聖書を学ぶようになりました。

二つの聖書研究会は、安息日について一致しなかったので、学べば学ぶほど、レッサは混乱しました。自分で聖書を研究しようと思った彼女は、両方の研究会をやめることにしました。「安息日を心に留め、これを聖別せよ」から始まる十戒の第四条、「聖なる日にしたい事をするのをやめ／安息日を喜びの日と呼び」(イザヤ58章13節)、「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟^{おきて}を守る」(ヨハネ14章15節)を読み、彼女は安息日を守る決心をしたのです。

最初、レッサはその決心を隠していました。ばかにされることを恐れ、教師たちに土曜のクラスの免除を頼むのも嫌でした。また、両親に何を言われるかも心配でした。しかし、長い間、決心を黙っていることはできず、「アドベンチストになる」と2学期の終わりに宣言しました。不安は現実になりました。ベリザリオと歩いていると、「ああ、あのアドベンチストか」と笑われました。教師たちは、土曜のクラスの振り替えを拒否し、彼女の成績は落ちました。教師たちは、「ここが嫌なら、退学なさい」と言いました。母は怒り、父には勘当されました。

ある安息日、レッサは、モザンビークアドベンチスト大学から来た学生に会いました。モザンビークのアドベンチストの大学を知った彼女は、興奮し、母に転校させてほしいと懇願しました。母は、最初拒否していましたが、レッサがエステル王妃のように、神様の介入を求めて3日間断食して祈ると、思いがけず心を変えました。転校して間もなく、「学費は出してもらわなくてもだいじょうぶ」と母に告げました。図書館の仕事で支払えることになったのです。驚いた母は、「主は、あなたの義父ではなく、本当の父親なのね」と言いました。



22歳のレッサは栄養学の2年生で、栄養失調が深刻なモザンビークで宣教師になる計画を持っています。3年前の13回献金によって、モザンビークアドベンチスト大学の栄養学科の新しい教室と設備が提供されました。

(アンドリュー・マクチェスニー)